

サタンは伊吹との会話を終わらせ D.D.D. をテーブルに置くとはああと顔を両手で覆いながら深くため息をついた。

そもそも夢とも現実とも区別がつかないような状態で廊下を徘徊していた自分が悪いのだが、こんな所で隠している本音をさらしてしまっただかと思うと恥ずかしさで顔から火が出るような気分だった。

サタンが夢とも現実とも区別がつかないような状態で廊下を徘徊することになってしまった理由は、昨日の夜の徹夜だった。最近売れているという評判を聞いて試しに読んでみた本が面白く、気がつけば朝食の時間。

眠気覚ましに濃い目のコーヒーを飲み、REDの食堂でもコーヒーを飲んだ。

学校自体はそれで一日無事終了。

問題は帰宅したその後で、アスモデウスが珍しいデモナスが手に入ってから自分の浴室と一緒に飲もうと夕食時に誘った。誘いに乗って風呂上がりには眠気が起きるまでデモナスを賞味し、気がつけば千鳥足で自室に向かいこのざまである。

サタンは顔を上げてソファアーにもたれかかり、再び深くため息をついた。

両目を閉じてぼんやりしていると、伊吹を抱きしめた時の感触と記憶がありありと浮かんでくる。

生きていることを示す体温、どことなく甘い髪の毛の香り、そして自分の肉体とは違う柔らかい肉体の感触。

サタンはふと、伊吹の首筋に自分の唇を押し付け軽く甘噛みしたのを思い出した。

サタンの歯に伝わった感触はしっかりと熟成された極上のステーキのような柔らかさで、このまま歯をむき出しにしたらすぐに歯形がついてしまのではないのかと思うようだった。

「クソ！」

サタンはソファアーにうずくまると頭を両手で抱えた。

一瞬湧きあがった「あのまま伊吹を部屋に連れ込んでしまえばよかった」という感情がもの凄くいまさらで、いらだちしか起きなかった。

思えばいつぞやにゴールドヘルファイアイモリ・シロップでトリップした時もあった。

セックスの最中でもないのに女の前でペニスを勃起させ、普段のサタンから想像もできない痴態を犯しているのに気がつかないほど目の前の伊吹に欲情していたのにも関わらず、サタンは伊吹にトリップを止めてくれと望んだ。

何もかもが終わった後でふと「あのまま押し倒してしまえばよかった」ということに気がつき、物凄くいまさらな後悔。

サタンはふと、レヴィアタンが自分に対して「いくじなし!!」と絶叫する時はこんな気分なのかと思った。

そう思うとなぜか心のいら立ちが収まり、後悔だけが心にとどまった。

「・・・俺もいくじなしか・・・」

サタン自身、それこそ伊吹が生まれる前からいくつかの恋愛経験はあったから、女に対して自分の感情を伝えることは慣れている。

なのに伊吹の前でだけは自分の感情を上手く伝えることができず、いつものどまで出かかった言葉はいつも心の内に納め、その体に触れたいと思って延ばしかけた手は自分の足に戻された。

(ああ、俺はなんて馬鹿なことをしたんだ!)

感情のままにベッドに飛び込み、普段は寝ながら読書をするために使用している大きな枕を抱える。

所々に本が置かれたシングルベッドの中では上手くもだえることが出来ず、サタンはわき上がった感情の八つ当たり先を失った。

酔いはすでに覚め目も冴えている。

サタンはまた徹夜で朝を迎えそうになる予感のため息をつく、軽く指を鳴らして自分の今の感情にぴったりの本を呼び寄せた。

サタンの手に収まった本はずいぶん前に読んでそのままになっている短編小説集だった。

ペラペラとページをめくり止まった所から適当に読み始めると、ちょうど両片思いの男女がセックスを行うシーンにあたる。

サタンはめまいが起きそうな気分になったが、黙って本を読み進めた。

男が女の首筋に唇を寄せ、キスマークを付けるために強く吸っているシーンにあたる。

サタンの脳内では自分が伊吹に対して同じことをやっているのが浮かんている。

女はわずかな痛みにあえぎ声を上げ、男の体に腕を回してもっとやってくれとせがむ。

一瞬サタンの脳内には伊吹が同じことをしているシーンが浮かびそうになったが、頭を振り慌ててそのイメージを振り払った。

（待てよ？この部屋には今俺しかいないんだから、別にこんなことする必要ないんじゃないか？）
サタンはそのことに気がつくど、指を鳴らしてドアのカギをしつかりと閉めた。

そして近くにあったテッシュを箱ごと自分の横に置くと、枕を定位置に置き直してからパジャマのズボンを下ろした。